



森は誰のものか



森

は誰のものかと問われたら、第一の答えは自然のものとなるだろう。森があり、森からの湧水があるからこそ、さまざまな自然の生きものたちも暮らすことができる。自然の生きものたちの母体、それが森である。

第二の答えは、森を営みの場としている人たちのものとなる。かつては森は、地域の人たちのさまざまな営みとともに展開していた。森を守り、森を使ってきた人々とともに森は存在した。だが森は、森の公益的機能が必要とする多くの人たちのものでもある。水やCO2の固定化、アメニティとしての森だけではなく、森は海の漁場をもつくりだしている。

だが、森を直接的な営みの場にしている人々、森の成果を享受しているだけの人とは、やはり同一ではない。

森の横で暮らしている人たち以外の人々を、森とともにある営みのなかには、導かないかぎり、すべての人たちに対して森は平等に開かれているというわけにはいかないのである。

この壁を越えたい一つの活動が、漁民が森づくりに関わることだった。気仙沼の漁民による「森は海の恋人」の活動はよく知られているが、

北海道の襟裳岬などではその前から漁民による森づくりがすすめられていた。

さらにもうひとつの動きは森林ボランティアの活動だった。間伐などをしながら森とともにある市民であるうとするこの活動は、いまでは全国にひろがっている。

水源税などをつくる動きも、それが効果的な役割を果たすのなら、森の維持に市民が参加する一定の意味はつくりだせる。

さらに最近では、村づくりに参加してもらうことによって、間接的に森とともにある営みを支えてもらうという動きも生まれている。たとえば私の村の家がある群馬県の山村、上野村では、村の95パーセントを占める森林を活用した村づくりがすすめられている。ただしそれは通常の林業ではなく、森の手入れなどで出てきた材を森林組合の製材所で加工する。村の森の7割は広葉樹であるが、針葉樹は柱や板にし、材質のよい広葉樹は木工用に製材する。それは村の木工職人たちに回され、さまざまな木工製品に生まれ変わる。コナラやミズナラはオガクズにされ、キノコ栽培の菌床に利用される。上野村はキノコの出荷額の多い村でもある。年間9000立方ほどの材が山から出されるが、そのうち5000立方は利用できない部分で、それらはペレットになって村の暖房やボイラー用燃料になり、さらに地域電力としてのペレット発電で使われている。また手入れをしながらよい森を維持していくことによって、村の観光基盤も生みだされている。昨年は1300人の村に21万人の観光客がきているから、この面でも上野村の森の役割は大きい。



内山 節さん

うちやま たかし 1950年東京生まれ 哲学者。NPO 法人・森づくりフォーラム代表理事。半世紀近く前から、群馬県の山村、上野村と東京との二重生活をしている。主な著書に『内山 節著作集』（全15巻、農文協）『「いのち」の場所』（岩波書店）『半市場経済』（角川新書）『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』（講談社現代新書）などがある

そしていまでは、このあらゆる過程のなかでいわゆるリーダーが活動し、さらにシステムの構築やその後の安定的な運用に村外者が関わっている。持続できる村をつくるために協力してくれているのである。

これもまた森に関わっていく方法だろう。村づくりに協力することによって、森とともにある村の営みを支える。

森は多くの人々に開かれていなければならない。とすると、どうすれば地域の人たちとも森とともにある営みを共有することができるのか。いまの森の課題は、その方法をつくりだすことである。